因果応報少女

魔玉星花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
因果応報少女

【Ｎコード】
Ｎ９５４３Ｌ

【作者名】
魔玉星花

【あらすじ】
とある格闘道場にて、もうじき孵化するバルキーのタマゴがふたつ。
ひとつは問題なく孵ったが、もうひとつはそれから数日経っても孵らない。
おかしいと思って駆け込んだ先のポケセンで待っていた展開は―
♂しか生まれないはずのバルキーに、もし♀が生まれたら？　という想定のもとに展開される妄想と趣味ワールドです。結構悪趣味で

すが覗いてみませんか？

0．バースディ（前書き）

♂しかいないポケモンにもし♀が生まれたら、という前提で書かれた話です。
また、ポケモンの架空病気描写があります。
そういった捏造設定や描写が苦手な方は、閲覧しない事をお勧めします。

0．バースディ

ここはあったかいね。
うん。
ずっといたいね。
そうかなぁ。
そうだよ。外よりもここにいたいよ。
おれは外にでたいなぁ。
わたしはでたくない。
どうしてさ。
どうしても。
外がこわいのか？　大丈夫だよ。まもってやるさ。
ちがう。
ならどうしてだよ。
どうしても、なんだ。
わかんないよ、どうしてだよ。
だって、わたし

外にでても、生きられないから―

おだやかな昼下がりも、そろそろ終わりかける時。
柔らかい日差しは分け隔て無く優しく降り注ぐ。この、どこにでもありそうな格闘道場も例外では無い。
門下生達はつかの間の休憩を終えて、また修行に戻る。彼らのポケモン達も思い思いのトレーニングを始める。台所では既に晩ご飯の支度が始まり、新入りや子供、彼らのポケモン達がそれを手伝っていた。
気合いの入ったかけ声が、空に舞い上がり、消えていく。

そして、そんな道場らしい時間の流れるその片隅に、２個のタマゴ。

「おお、何かカリカリいってら」

「何サボっとる！」

こういう所には、大抵サボリ魔…というか、楽ばかり考えてるお調子者がひとりはいるものである。今日も弟子のひとりが、修行をサボってタマゴの様子を見に来ていた。

まったく、タマゴが気になるのは結構だが、やるべき事をしないのは少々考えものである。

「いやでも師匠。もうすぐ孵りそうですよ、このタマゴ！」

「まったくお前って奴は、いつでもタマゴの事ばかりだなぁ」

師匠と呼ばれた大柄な男は、そのお調子者の弟子の言葉に溜息をつく。

気持ちは解らないでもないのだ。もうじき、今日にでも孵りそうなタマゴは、この弟子だけでなく道場内すべての人達の関心事だし、かくいう自分だって気にはなるのだから。

でもだからといってこれでは困る。他の弟子にも示しがつかない。

「気がかりなのはわかるが、しっかり自分を鍛えんかい」

「うーっす、サーセン」

ごめんの言葉も調子に乗る弟子に、師匠は二度目の溜息をついた。なんとも平和である。

ぱきり。

「！？」

何か、硬くて薄いものを折り取るような音。

そんな音を出すものは、この辺にはひとつしかない。師匠も弟子も、道場に戻りかけていた所をあわてて振り返り、そのまま走り出す。

２人が駆けつけると、タマゴのうちのひとつに大きな亀裂が入っていた。一部は砕け散り、殻のカケラがぽろぽろ崩れる。
「し、師匠…！」
言われんでもわかると、師匠はうわの空のような声を吐く。
お調子者を呼びに行ったきり帰ってこない師匠を呼び戻しに来たのか、他の弟子達もわらわらとタマゴの側にやってきた。そして、誰もがかたずを飲む。
「す、すげぇ、タマゴが…」
孵化を見るのが初めての弟子も居るのか、感嘆の声も聞こえる。
ぱきり、ぱき、ぱき。
大勢の男達に見守られたタマゴは、その亀裂をどんどん広げる。そのうちに殻には大きな穴が空き、少し紫がかった桜色の指が隙間から覗いた。
ひびわれの走ったタマゴは、大きく割れ、崩れる。

「生、まれっ…」
「やっほぅい！」
弟子達は手を取り合い、たたき合い、叫び合ったりと、まるで試合に勝利したかのような騒ぎよう。
師匠もおいおいと呆れ声を出すものの、その表情はほころんでいた。
彼らの側には、割れて散らばったタマゴの殻と、その中心で師匠達をじっと見据える１匹のポケモン。
大きくて、それでも決して甘えない黄金の瞳。小さいけれど力強さを隠し持っている桜色の手。同じ色の、幼さも可能性も感じさせる、突起状のものが付いた丸い頭と顔。折れそうな位細いのに、蹴られたら痛そうな強い足。
なんとも勇敢そうな奴じゃないか。師匠は嬉しそうに、そっと頭をなでてやった。
「さて、バルキー。お前には何て名前をつけてやろうか」

身体に散っている殻をていねいにつまんで取り除きながら、そうつぶやく。今目の前にいる新しい仲間を喜び、そしてまだ姿を見せぬ隣の子に思いを馳せながら、ご飯を知らせに来た新入りにあとを任せ、師匠は道場へと消えていった。

「……」

あれから数日後。例のお調子者が、またタマゴの側でサボりを満喫していた。

「こらあああぁぁ！！」

「うわ、師匠！」

「まったくお前という奴は！」

日常茶飯事といえど、それで見放す訳にもいくまい。タマゴの側にいた赤ん坊バルキーごと驚かす大声で、師匠はどなりこんで来た。

「タマゴはサボりの理由にはならんぞ！」

「い、いえ、でもしかし」

「でもしかしではない！」

「だ、だってですね！」

普段ならここで根性無く逃げ出す弟子なのだが、今回ばかりは引かなかった。

「おかしくないですか！」

その根の張った大声に、さしもの師匠も少々たじろいだ。

「…な、何をだ」

「だって、この2個のタマゴ…どっちも同じ日に生まれたバルキーのタマゴですよね」

…！

師匠も、弟子の疑問と同じ所に気づいたようだ。

同じ日に生まれ、同じ環境に置かれた、同じ種族のタマゴが、全然違う日に孵るという事実に。

ポケモンのタマゴ孵化にかかる日数は、種族ごとの違いはあるが、同種族ではほとんど差は無い。生き物ゆえ多少個体差はあるものの、

同じ日に生まれたタマゴ同士なら大抵同じ日に孵る。
　数日もの差、しかもカリカリという孵化音さえ聞こえてこないというのは、明らかに異常だ。
「よく気づいた！」
「師匠、やっぱり…」
「すぐにポケセンに連絡を入れてくれ！」
　師匠の様子はただごとじゃない。弟子はすぐにポケギアをひっつかみ、かかりつけのポケセンへツータッチで電話を掛けた。焦る声と慌てた口調でいまいち要領を得ない説明だったが、向こうは緊急事態だとすぐに判ったのか、短い会話で電話は切れる。
　ひとっ走り様子を見に来た別の弟子から、この事が道場全体に知れるまでにさほど時間はかからなかった。

「あと少し遅れていたら窒息してましたね」
　ポケセンの救急外来で、師匠と、チェリーピンクの髪をふたつに結った女医姿の女性が向かい合って話をしていた。
　淡々と話すジョーイの言葉に、師匠は冷や汗をぬぐう。
「こんな事があるんですね…」
「非常にまれなケースですが、自力で殻を破れず死んでしまう事もあります。今回の場合もそれらと同じように、ポケモン自体に殻を破れるだけの体力が備わっていない事が原因でしょう」
「……」
「今、処置と検査をおこなっていますので」
　ジョーイはそれだけ伝え、ナース姿のラッキーやハピナス達があわただしく出入りする処置室へと戻っていく。
「師匠、タマゴは！？」
「今治療しているそうだ…サボりはいただけないが、今回ばかりは感謝するぞ」
　それを聞いて安心したか、弟子はいつものお調子者スマイルで、ピースサインをしてみせた。その腕には、タマゴの側にいたあのバ

ルキー。
「なんだ、連れてきたのか」
「ホントは置いてくつもりだったんスけど、どうしても行きたいのか暴れだして」
で、全責任俺が負うから連れて来たんスよーと、軽い口調で事情を説明した。確かに、今この時点でも手を離せば処置室に駆け込みそうだ。身を乗り出し、目は釘付け、手足をばたばた動かして行きたそうに見える。
「タマゴ状態とはいえずっと一緒に居たから、仲良いんスかね？」
「…そうかもな」

師匠が隣に座る。いつも疲れの片鱗も見せない気丈な師匠が、滅入った顔で。
ポケセンに泊まり込みかもなぁ。この状況に、弟子はそんな事をうっすら考えていた。
検査は結果が出るまで、どうしても最低1日は要する。また、無事に一命をとりとめていたとしても、命に別状無いと判断がつくまでもまた時間が要るだろう。
そして、今腕に抱えているこの子が、それまでいったん道場に帰ったとしても大人しくしてくれるとは思えない。
「バルちゃん、みんな心配してんぜ。カラダ弱いってぇ話らしいけど、…死ぬなよ」
弟子は小さな声で、祈るようにつぶやいた。師匠にも腕の中のバルキーにも、誰にもそれは聞こえなかったが、それでも天にだけは聞こえるように、と。

0．バースディ（後書き）

微妙にアニメの設定とかかいつまみで拝借してます。

1．マリア（前書き）

♂しかいないポケモンにもし♀が生まれたら、という前提で書かれた話です。
また、ポケモンの架空病気描写、バルキー♂→バルキー♀の恋愛描写があります。
そういった捏造設定や描写が苦手な方は、閲覧しない事をお勧めします。

1．マリア

ポケセンでの一夜が明けた。
道場はもうこの話題でもちきりで、修行にも身が入らないくらいだって事を、連絡の電話で知った。まだ、結果は知らされていない。
「師匠、疲れてないッスか」
弟子がミックスオレを買ってきてくれた。そういえばまだ朝ご飯も食べていない事を思い出し、適度に糖分のあるそれをメシ代わりにとかっ込む。弟子は自分でも飲みつつ、バルキーにも飲ませてやっていた。
まだ缶からうまく飲めないのか、飲んではこぼすバルキーに手を焼かされながらも、弟子は実に楽しそうに面倒を見ている。
「モーモーミルクにするべきだったかなぁ」
いつもならそうじゃないだろと言いたくなる弟子の的はずれ発言も、今の心張りつめた状態には安らぎに思える。
「ああ、気になんだな。大丈夫だって、お前の親友はちゃんと治してもらってっから」
だけど、そうそうほのぼのしてもいられない。忙しそうに出たり入ったりを繰り返すラッキー達の様子で状況を推察するしかない今、現状が判らないという不安と焦りは消えないままだ。自分だけでない、弟子もバルキーも、道場に残っている皆も。
飲みきったミックスオレの缶をふたつ、ゴミ箱に放る。

「一命はとりとめました」
だから、その一言でどれだけ安堵した事か。本当ですかと叫ぶ師匠の横で、弟子はバルキーを抱えてへたりと座り込んだ。
「良かったな、お前の親友、助かったって」
弟子がそう言ってやると、それまで比較的大人しかったバルキーはまたばたばた動き出す。よほど会いたいのだろうか、鳴き声まで

上げて。
「会わせてやれねぇッスかね」
「まだ落ち着いてないから、もう少しね。ガラス越しなら今日中に会えるわ」
「だってよ」
あざーっすと一礼し、弟子はとりあえずバルキーを落ち着かせようとあれこれなだめ始める。自分も手を貸してやろうと師匠も駆け寄ろうとして、ジョーイに呼び止められた。
「すみません、いいですか」
「はい？」
「…検査結果と、それに関する事でいろいろ説明がありますので」
ジョーイの表情は重かった。
確かに命は助かったのだろう。だけど、とてもじゃないが無事で済んでいるような様子でもなかった。
弟子に後を頼み、師匠は祈るようにジョーイの後をついていく。

『トレーナー相談室』
無機質にそう書いてある部屋に、師匠は案内された。
入ってすぐのラックには、ポケモン難病の説明パンフレットやら、そういったポケモンを抱えるトレーナーの会の案内チラシやら、支援制度の説明リーフレットやらが一杯に差されていた。
そして白い机の上には、結果が入っているであろう大きな封筒と、封筒に隠れて内容は判らないが、何かリーフレットのようなもの。
何度かいたか判らない冷や汗が頬を伝った。
「どうぞおかけになって」
ジョーイに着席をうながされ、師匠は座る。その間に、ジョーイは封筒から2匹分のポケモンの検査結果を出した。
「こちらがこの前孵化健診に来た子の結果、こちらは昨日運ばれた子の結果です」
汗のにじむ手で結果を受け取り、おそるおそる読む。

普通に生まれてきた方のバルキーはまぁ、横の正常値と比べて見ても引っかかる所は無く、高めの攻撃を活かして育てて行くのが良いだろうと思える結果だった。
問題はもう一枚。
本当を言うと見たくは無い。だけど、今逃げ出したらあの子の事はどうするのだと、自分自身の声が頭に響く。腹をくくって読んだ。
「…覚悟は、していましたが…」
目の前に差し出された結果は、予想以上に酷かった。
誰が見たって判る異常値の嵐。自発呼吸が無い事を示す呼吸数の空欄をはじめ、人間で言う血圧や血糖値、血球数などはもちろんの事、消化系に循環系、神経関連に至るまで、ほぼ全ての項目に於いて結果の数値は基準値の範囲外だった。
今頃ＢＰＩＣＵ（ベイビィポケモン集中治療室）に居るであろうあの子の様子が、脳裏にありありとえがきだされる。むしろ、この数値でよく一命をとりとめたものだ。
「…この子…この先、生きられるんですか」
震える師匠の声に、ジョーイは重い空気に押しつぶされるように少し黙る。しかし、彼女はすぐに話を始めた。
「自発呼吸が始まれば、生きる事は出来ます」
「ほ…ホントなんですか」
疑うような口調で返す師匠に、ジョーイはなおも話を続ける。
「ええ、私達もあまりの異常値に再検査をしたんです…遺伝子検査も視野に入れて調べ直しました所、これら全ての値があるひとつの遺伝子異常を原因としている事が判りまして」
「そ…それは一体」
ジョーイは、封筒から3枚目の結果用紙を黙って差し出す。師匠はそれを奪い取るかのような勢いで掴み、むさぼるように読んだ。
数字で端的に示される基本検査とは違い、染色体の様子を専門用語で書き込まれたそれでは何が正常なのか異常なのかはよく判らない。目はすぐに、医師の所見欄にいった。

そこに書かれた一文で何を言いたいのかは、師匠も判った。だけど、それは自分の目を疑いたくなる一文。

「…X染色体過多及びY染色体欠落症、性染色体異常…まさか」

ひとがたに分類されるポケモンは、その染色体もヒトに似ている。特に性染色体は酷似しているので、医療界でも書き表し方は人間に準じている。

「…この子…女の子って事ですか」

「そうなりますね」

もちろん、女の子ってだけだから普通のポケモンでは正常だ。だけど、この結果をはじき出しているポケモンは、普通は♂しか生まれてこないバルキーである。

「信じられない気持ちもわかります。しかし再検査してもおそらく結果は同じですよ」

「…いえ…否定したい訳ではないですが」

動揺している師匠の目に、机の上のリーフレットが映る。さっきは封筒にさえぎられて表紙文字が見えなかったが、今はどかされて文字が目に入る。

そこに書かれていた病名は、先ほどの性染色体異常症の俗称だった。

「世界でも片手ほどですが、女の子のバルキーが生まれて来たという報告はあるんですよ」

「太陽がミナモから昇る、のようなありえない話だと思っていましたが」

「ええ、私も最初知った時は驚きました」

リーフレットをもとに、ジョーイの説明は続く。

検査値や個体値に、特徴的な異常を有する事。その為に虚弱体質になりやすく、長くは生きられない可能性がある事。また、戦いの

道を歩むことが非常に難しい事。そして、異常個体値の為に、進化先がほぼ一択に限られてしまう事。
「このうち2件は進化したそうなのですが、進化先はどちらもエビワラーだったそうです」
「こんな異常に低い攻撃と異常に高い防御じゃ…そうなりますね…」
リーフレットと検査結果を交互に見ながら、師匠はつぶやく。
「進化先の自由すら封じられてしまうなんて」
「…でも、この症状の恐ろしさは、それだけじゃないんです」
「え」
ジョーイの表情は、今までとうってかわって、怒りさえ含んだ表情になる。
「伝説のポケモンとは違い、バルキー一族は確かに数は少なめですけれど、決して手に入らないポケモンではありません。育てたいと思えば、普通に手に入ります」
「ええ、それはわかります。仮にも私だって格闘世界に身を置く者ですから」
「そんな普通のポケモンで、色違い以上に貴重な、世界に数例しかない珍しい個体…」
そこまでジョーイが言いかけて、師匠は気がつく。
バルキー系はどちらかというと希少な部類のポケモンで、個体数は珍しいと言われるイーブイ系と大差無い。だが、保護対象になるほど個体数が少ない訳でもない。
総数に対して数体だと、パーセンテージで表した時の小数点以下のゼロの数は結構な数になる。そのうえ研究という観点から見ても、これほど興味をそそられるサンプルもあるまい。
そんなポケモンを目の前にして、人間がどういう行動を取るかなど…もはや説明の必要も無いだろう。
「身体が弱いのに加えて…そんな過酷な運命まで背負わされるんですか」
「…実は、この数例の女の子バルキー達…現在はどのケースも生存

はしていないんです」
「！？」
師匠は大きな音を立てて椅子から立ち上がる。机は勢いでずれ、椅子はそのまま後ろに倒れた。
「そんな、残酷な…！」
ニドラン系以外にも性別区分がある事が発見されたのは、つい十数年ほど前。勿論、バルキー系に♂しかいない事が判ったのも同じ時期である。
「たった十数年の間に、みんな死んでしまったんですか…！？」
「…虚弱体質の所為もありますけど…一番の原因は」
師匠は頭を抱え込んだ。
自分自身だけの問題だったらどんなに楽だろう。自分だけが覚悟を決めて腹をくくればいいのだから。
だけど、頼んでもいない女の子に生まれついて、その為に想像を絶する苦難を強いられて生き、挙げ句の果てにたった十年ほどでその生涯を閉じてしまうという覚悟を、生まれてすぐに強いられるのは、自分ではなく今眠っているあの子だ。
「一番の原因は、珍しいからと人間に追い回される、その過大なストレスにやられてしまう事なんです」
怒りに震えたジョーイの言葉が、ずっと師匠の頭を巡る。
出来る事なら事実ではあって欲しくなかった。だけど、事実だと判ってしまった。
逃げたって誰も責めないような過酷な運命を、生まれたばかりのあの子に強いるのは、他の誰でもない、自分達人間なのだという事を。

「もう、今まで何話してたんスか！」
何も知らない弟子は、集中治療室のガラス前で例の子を見ていた。さっきまでばたばた落ち着かなかったバルキーは、それまでが嘘のようにじっと張り付いている。

「すまない…ちょっと大事な話をな」
さすがに、あんなショッキングな内容を説明する事は出来なかった。自分自身、心を落ち着ける時間が欲しかったし、あまり事を急いでも良い結果にはならないだろう。
「まーいいッスけど…それより師匠、あの子めっちゃ頑張ってッスよ」
「…ああ」
ガラス越しに見えた“彼女”は、人工呼吸器や点滴などの管を山のようにつけられ、カプセルのような保育器の中で、眠っているかのように動かずじっとしていた。繋がれた先の心電図は、さっき見た異常値の拍数を安定して刻んでいる。
それでもよく見ると、時々指やまぶたはかすかにだが動かしている。それだけが生きている証だった。
「鳴き声をあげたらもう大丈夫って言われたんスけど」
「ああ」
「だから祈ってんスよ、こいつと。声を聞かせてくれやって」
弟子は笑ってそう言いながら、側でじっと彼女を見ているバルキーの頭を撫でる。
「あとね師匠。あいつもしかしたら女の子かもよ」
「…！？」
冗談半分のような弟子の言葉に、師匠はたいそう驚いた。
もちろんいくらこの弟子が馬鹿だろうと、バルキー系に♂しかいない事くらいは知っている。かのオーキド博士は実は女性だったんだよ！並に無理のある冗談なんて、こんな状況で飛ばしはしない。
「…何でそう、思ったんだ」
「いやぁだってさ、こいつのあの子見る目がらぶらぶしてんだもん、そう考えてみたくもなるッスよ」
「…そういうもんかなぁ」
でも、言われてみればそうかもしれないと師匠も少し思った。確かにこの表情、一言で言えば「甘い顔」だったのだから。

師匠はふうと大きく一息つき、腹をくくった。弟子に詳しくを話す。
「マジなんスか！」
「ああ」
弟子にしてみればひょうたんからポニータだろう。師匠の話を聞き、へぇとばかりに改めてガラスに張り付く。
「だったらなおのこと生きて貰わなきゃ！」
「…あ、ああ」
「だってそうッスよね、普通あり得ない女の子として生まれたんなら、ぜってぇ何か大事な意味があるっしょ」
自信満々にそう言い切る弟子の目は、いつになく輝いていた。
珍しさ故に追い回される運命や、身体が弱くて長生き出来ない事などには、恐らく考えは及んではいまい。いや、その事に気づいていたとしても、それ以上に意味のある何かを信じているようなまっすぐな言葉だった。
「…そうだな、きっと大事な使命を持ってるんだ」
「それにさ、あの子が元気にならないと、こいつの初恋実らないッスもん」
ニヤニヤ笑いながらそんな事を言っていた弟子が、急に痛てぇと叫ぶ。
何事かと驚いた師匠が見やった先で、さすがに2度3度とからかわれて怒ったのか、バルキーがその力任せの握力で弟子の腕を締めあげていた。直後、ここは集中治療室なんですよとジョーイが怒りで飛んでくる。
「さ、サーセン、マジサーセン」
口で謝りながら、手はギブ、ギブとバルキーをなだめる。
仕方のない奴だなと師匠は笑う。その笑顔の奥で、いちトレーナー、いち道場主として、精一杯あの子を支えてやろうと、そう覚悟を決めた。
存在しないはずの女の子として生まれたあの子が、どう生きてい

くのかなんて今は判らない。だけど、何か意味があってそんな特別な生を受けたなら、それを見届けてやろうと、師匠は心に決めていた。弟子も、おそらくは同じ事を考えているだろう。

まったく、そんなからかわなくたっていいじゃないか。

「おーおー、そんな真っ赤で涙目にならなくたっていいよー」

次はなぐるぞ！

…でも、やめといた。どうしたってやめてくれそうにねぇもん、このおちょうしもの。

「もうからかうのはよしとけ」

「はーい師匠」

おれはガラスのところにいく。あのこはずっとねむってる。ねぇ、おきてよ。

うまれる前の「そとにでてもいきられない」って、この事だったのか？

でもいきろよ。おねがい。人間たちがいってたんだ、なきごえがだせたらだいじょうぶって。

「何か祈ってるふうじゃないッスか」

「うむ…言われてみればそう見えるな」

なぁ。こえをきかせて。おれのこと、呼んで。かすかでいい、ききのがさないから。こわかったらまもってやる。おれがついてる。ひとりじゃないんだ、あんしんして。なぁ、そばにいるから、いきてくれ。たのむ、おねがいだ。だって。

「…あれ」

タマゴのなかにいたときから…おれはおまえが、好きだったんだから！

弟子がしきりに目をこすった。

「どうした？」

「…いやー。何だろ、一瞬…」
弟子がそう言いかけたのをさえぎるように、ジョーイが慌てて駆け出す。行き先はガラスの内側。
師匠も弟子も、何事かとガラスに張り付いた。
集中治療室に入ったジョーイは、人工呼吸器に繋がっている計器をしきりに確認しながら、そっと耳をそばだてるようにカプセルに張り付く。やがて、その表情は晴れやかなものに変わった。
その理由は、聞かずとも師匠も弟子も、そしてバルキーも判った。
「…聞こえたか、今の！」
「はいッス！」
耳に飛び込んで来た声は、ガラス越しでも聞こえてきた生命の始動。
「生きられるんスね、あの子！」
「ああ！」
弟子はいよっしゃあああと力一杯のガッツポーズをかまし、その勢いそのままにバルキーを抱きしめた。同じく嬉しそうにしているバルキーと一緒に、調子に乗ってくるくる回っちゃったりなんかして、ふらっとよろけた所を師匠にがっちり抱き留められる。
何をやってるんだ、との呆れ声は、誰が聞いても判る涙声。
「もう安心ですよ！」
ジョーイはそう言おうとして、やめておいた。言わなくても判っているみたいだし、言っても多分聞いてやしないだろうから、と。

「え、その子生きられるんですか！？　マジで！？」
「ああ！　ただまだ呼吸は弱いし、ものを飲み込む力が足りないというんで、もう少しポケセンにいなきゃならんそうだが」
「でも良かったです！　道場の方も気が気で無かったんですから」
そんな会話をポケギアでしたのはついさっき。だが、帰るまでのほんの数分で道場中に伝わっていたらしく、門を開けた途端２人と１体は質問攻めに遭った。

降ってくる質問をかわし、あるいはさっと答え、しまいにはまとめて説明する！と叫びながら、師匠達はまず道場で一休みしようと中へ入った。
まかないさんがすぐに茶と軽食を持ってくる。
「師匠、実際の所はどうなんでしょうか」
「…ああ、説明せねばならんな」
「頼みます。師匠、肝心な所は伏せて話すもんですから、困り果ててたんですよ」
ホントに困っていたようで、苦笑いを浮かべながらまた別の弟子がやってくる。あのお調子者始め他の者と違う雰囲気は、彼が弟子の中でもかなりの実力者だという事をうかがわせる。
「あら師範代さん、そんな急かなくても、時間はまだたんとありますよ」
「はは、まかないさんには敵いませんな。しかし早く状況を把握したいという事もありますので、師匠が良ければすぐにでも」
「ああ」
師匠はためらうように箸を置いた。
疲れはまだ残ってはいるが、何も出来ないわけではない。だけど、どうしても気が進まなかった。
それでも、いずれは話さなくてはならない事。ジョーイから貰い受けた封筒を手に取り、道場の者達を集合させた。

反応は様々だった。
頬をつねる者もいれば、隣の者と話し始める者もいるし、真剣な顔でリーフレットに見入る者もいた。成長したら可愛くなるかななどと暢気な事を考えている馬鹿もいたりしたが。
その馬鹿に「だめだよもう予約済みなんだからさ」なんてツッコミを入れちゃってるあのお調子者に乾いた笑いを飛ばしながら、師匠は周りをざっと見る。
反応の違いはあれど、皆拒絶はしていなさそうだった。それどこ

ろか、早く戻ってこないかなという声がちょくちょく耳に飛び込んでくる。
「師匠、何スか怖い顔しちゃって」
「…何でもないさ」
「もしかしてあの子がいじめられるかもとか、そんなん考えてたんスか？　ないない、みんな会いたくてしゃーないんスから！　だよな！」
お調子者の言葉に、その近辺にいた者達がオゥスと同調する。
さすがに若い者達は思考が柔軟なのか、前例の無いような事態も普通に受け入れているようだった。その楽しそうな様子に、考えすぎかなと師匠も息をつく。
「ああそうだ！　そういやさ、こいつの名前決まったん？」
「決まってねぇよ。つーかよ、それどころじゃなかっただろが！」
「候補はいくつか出てたんだけどさ、どれもピンと来なくて」
弟子達の話題はもう次に進んでいる。そういえば、まだこのバルキーは名前すら付けていなかったんだったかと、師匠は思い返した。そんな暇無かったといえばそうなのだが。
「お前なんかない？　いいのあったらそれで決めるよ」
「マジ？　じゃあさ、じゃあさ」
お調子者の目が輝き出す。よほどとっておきのニックネームでもあったのだろうか。
「えんぜるって付けてぇんだけど！」

…辺りは凍り付いたような静寂が走った。

「…お前さ、中二病だって言われた事ねぇ？」
「ねぇよ失礼だな！　それにちゃんと根拠があるんだもんねーだ」
横で聞いていた師匠は凍り付いた笑いしか出せなかった。天使そのものな名前なんて、悪・闇・破壊と並んで「ちょっと痛い」系の代表格だろうが、と。

「根拠？」
「ああ。師匠さっきさ、あの子が目ぇ覚ましたってったろ」
「うん」
「そん時さ、こいつも祈ってたんだよ。んで、目ぇ覚ました瞬間、見えたんだ」
彼の説明は自信満々だった。この時点ですでに突っ込み所は満載な説明だったが、そんな事はまるでお構いなしだった。突っ込みはおろか質問すら無視しかねない勢いで話は続く。
「こいつの背中に、天使の羽がさ」
…辺りはさっき以上に凍り付く。もはやあまりの説明に、誰も口を開けなかった。
「あ、疑ってやがんな！」
「信じられっかよ馬鹿！　やっぱお前に聞いた俺らが間違ってたよ！」
他の弟子達はもう彼の説明には目もくれず、自分達であれこれ名前を出し合っていた。
「師匠も見えたッスよね！？」
「見えんよ、お前じゃあるまいし。もしかして、あの時目をこすってたのはそれだったのか」
「そうッスよ！」
弟子はふくれっ面でそう答える。そんな怒ったように言われても困ると師匠は溜息をついた。
「何、お前マジで見えたのかよ」
「だからさっきからそう言ってんだろうが」
やれやれ、名前決めはまだまだ白熱の議論が続きそうだ。そう思ってか、師匠はそこを離れて、自分の仕事をまっとうしようと道場を後にした。
廊下へ行こうとして、先ほどの師範代とすれ違う。
「……」
ほとんどの者が喜びや安堵の表情を浮かべるなかで、彼だけは難

しい顔をしていた。
どのくらいぶりかの冷や汗が流れる。ほんのかすかだが、何となく嫌な予感がした。

「おーい、えんぜる！」
「えんぜるこっちだよ！　早く来い」
晩飯の支度中らしく、弟子達はあわただしい。その飛び交う会話に、師匠はおや、と思って弟子のひとりに話しかける。
「何だ、結局その名前になったのか。説得されたか？」
「まっさか！　俺ら誰も納得なんてしてないですよ」
じゃあ何で、と思わずにはいられなかった。仮に押し切ったとしたら、こんな和やかな雰囲気で、普通に呼んだりはしないだろうに。そもそもあいつ、そんなごり押し出来るような立ち位置になんて居ない。そんな事を考えていると、納得いく返答がすぐに返って来た。
「でもしゃあないじゃないッスか。こいつ自身が気に入っちゃったんですから」
「…ああ、なるほどな」
弟子はちょっと困ったように話す。確かに、本人が気に入ってしまったなら仕方ない。よくこんなアイタタな名前を気に入ったもんだとは思うが。
「でももういいやって、みんな。悪い名前って訳じゃないし」
「まぁな」
「それに、女の子の方は全員一致でみんな納得して決まった名前があるんスよ！」
「…？」
そっちまで決めてあったのか、と師匠はたずねる。
実はこの若い弟子達は性格も感性もバラバラ、決め事の意見なんて多数決で決着が付けば良い方である。おそらくえんぜるの名前が一週間近くも決まらないでいたのは、全員がまるで違う名前を提案して一歩もゆずらなかったからだろうと推測はついた。

今だって、台所の方からえんぜるに何を手伝わせるかでもめる声が飛んでくる。
そんな何もかもバラバラで個性の強い弟子達が、皆一致で決まった名前には、師匠も興味を持たずにはいられなかった。
「…で、一体どんな名前なんだい？」
「うん、あいつが生まれてきた意味とか考えたらさ、これしかないってなって」
「ほう」
「男の子に出来なくて、女の子に出来る事って、でっかいのがひとつあるじゃないですか」
…ああ、そうか。なるほど、それで皆納得したのかと。
「…「まりあ」って、つけるつもりなんです。みんな」
本人が気に入るかどうかわかりませんけど、と弟子は軽く笑う。
そんな彼に、師匠は絶対に気に入ってくれるさと肩をぽんと叩いた。
「てめ、いつまで油売ってんだよ」
「わりぃわりぃ」
弟子はうっすと軽く挨拶し、台所へと消えていく。その後ろ姿を見守りながら、師匠はこれから始まるであろう新しい生活に思いを馳せた。
「聖母、か。確かに、母親には女の子しかなれないもんなぁ」
レアケースのポケモンを育てていく事には、やっぱり不安はある。だけど、こうしてもう名前まで決めて、彼女の退院を心待ちにしている弟子達もいる。
案ずるより産むがやすしとはよく言ったものだが、案外、問題なく暮らしていけるのではないか。そんな事も師匠は思ったりしていた。
…それは実に甘い考えだったと、のちに思い知らされる事になってしまうのだが。

1．マリア（後書き）

「異常に低い攻撃＆異常に高い防御」は一応元ネタはあります。旧金時代に♂は若干攻撃が高く、♀は若干防御が高いってのを小耳に挟んだ事がありまして。じゃあ♀として生まれたなら攻撃下がって防御上がるかなーなんて思ったりしてました。

ちなみにニックネームはマイてもちからとってます。中二全開？

細けぇ事ぁいいんだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9543l/

因果応報少女

2010年10月13日14時59分発行